

放送人の会

NO.51

2011.6.17

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&FAX 03-3221-0019 Mail info@hosojin.com

代表幹事 今野 勉 編集担当 伊藤雅浩(会報編集長)、鈴木典之、松尾羊一 事務局 佐藤真美子

イベントへのお誘い

代表幹事・今野 勉

本年度の放送人の会の活動の概要を会

員の皆さんにお伝えしようと思ひます。会員の皆さんの参加を期待してのことです。

2011年度の放送人の会の活動は、5月21日の総会と、そのあと行われた放送人グランプリ贈賞式から始まりました。

贈賞式およびそのあとの懇親会の様子は当会報に詳しく報じられているので、省略させて頂きますが、読売新聞に載った鈴木嘉一編集委員のコメントの一部を紹介しておきます。

「プロの制作者が選ぶこの賞は、取り上げにくい題材やテーマに果敢に挑む志を重視する点で、ほかの賞とはひと味違う」

(読売新聞5・31付)
会員の皆さん、作品推薦の労、ありがとうございました。

近々の行事は、7月16日(土)の「ドキユメンタリー・ワールド」です。担当の桜井均幹事が「東北」をキーワードに構想を練っています。このキーワードの拠つてきたるところは、もちろんお解りのことと思ひます。詳しくは当会報の予告記事をご覧ください。

下さい。

今年のメイン・イベントは、何と言っても、9月22日から25日まで開催される第11回日韓中テレビ制作者フォーラム札幌大会です。

3月に札幌で行われるはずだった3ヶ国の予備会議が、東日本大震災の影響で中止となり、そのまま予備会議なしの開催となるなど、波乱の幕開けとなっています。

札幌大会のテーマは「地域と暮らし」です。このテーマでやるからには、地元のテレビ局や制作者、そして市民の方々の参加なしでは、面目が立ちません。

そこで、夕張市出身の私としては、実行委員長の札幌テレビ・林健嗣幹事を側面から支援するために、スペシャル・サポーター、つまり助っ人隊を編成することを考えつきました。

北海道ゆかりの放送人に助っ人になって頂いて、その人脈を利用して、地元へのPR活動をしようという企みです。以下の方々が心よく助っ人を引き受けて下さいました。(50音順)

石橋冠(演出家、札幌出身)、音好宏(放送批評懇談会理事長、札幌出身)、金平茂紀(TBS報道キャスター、旭川出身)、河野尚之(元NHK放送総局長、札幌・北見に7年間勤務)、今野勉(演出家、夕張出身)。

7月26日に一同打ち揃つて札幌に集まり関係諸方面をまわり、記者会見を開いて札幌大会の事前PRにつとめる予定です。会員の皆さん、この9月、北海道旅行かたがた、1日だけでも札幌大会に顔を出してみませんか。

9月から来年3月にかけては、例年のごとく「名作の舞台裏」や「人気番組メモリー」が横浜情報文化会館で行われます。

先日「名作の舞台裏」6羽のこともめ「では、これがテレビ最後の仕事と思ひ定めた脚本家・倉本聡さんの話、そして倉本さんの思いを受けて身体を張つて脚本を上司の圧力から守り抜いたプロデューサー嶋田親一さんの話に一同胸を打たれました。「人気番組メモリー」進め電波少年」では、松村邦洋さん以下の出演者の暴走まがいのヒートアップぶりに満場湧きに湧きました。

会員の皆さん、今年は何れかひとつでもイベントにご参加のほどを。

放送人グランプリ2011(第10回) 贈賞理由

グランプリ ドラマ「大阪ラブ&ソウル」制作スタッフ様 (NHK大阪)

在日コリアンの青年と亡命ミャンマー人の娘の恋物語という、ドラマの常識を打ち破る大胆な設定が痛快である。民族と国籍というむずかしいテーマで、メッセージに富んだリアルな物語を作り上げ、多文化共生について考えさせた制作姿勢をたたえて。

(演出・安達もじり、制作・越智篤志)

特別賞(1) 大森淳郎様 (NHK)

ここ数年來のETV特集における一貫した充実のドキュメンタリー制作をたたえて。とくに2010年度は、ETV特集「敗戦とラジオ」(2010年8月15日放送)で日本の放送の民主化過程を検証し、同「深く掘れ己の胸中の泉く沖繩学のまなざし」(2011年2月20日放送)では沖繩学の系譜と、消されつつある沖繩文化の底流を提示して、ともに戦後日本における米国の文化的占領について鋭い問題提示をおこなった。

特別賞(2) 中崎清栄様 (テレビ金沢)

最新作「田舎のコンビニ」に至る一連のドキュメンタリー制作に対して。この番組は、奥能登の過疎化の人びとの暮らしの変化を何年も丹念に追ったもので、これまでも人情味あふれる注目作を発表してきた。撮影・構成担当の辻本昌平氏との共同制作法も、地域のテレビ制作に新風を吹き込んでいる。

奨励賞(1) ETV特集「なぜ希望は消えた?あるコメ農家と霞が関の半世紀」制作スタッフ様 (NHK)

稲作専業農家で生きようとする農家の努力と、国の農業政策が、ことごとくかみ合わない半世紀の現実を描いたドキュメンタリー。大規模農業をめざした1961年の農業基本法は、高度成長と土地値上がり神話のなかで挫折、大規模耕地整理も、農地の住宅地転用を促すにいたり、1970年からの減反政策は、稲作農民の意欲を奪っていった。

田園は荒れ、後継ぎのいない今、自分の半生と真摯に向き合う稲作専業農家と、農政の舵取りの失敗をあっけらかんと認める高級官僚の対比がみごとである。

(ディレクター・久保健一、プロデューサー・矢吹壽秀)

奨励賞(2) 高橋竹山生誕100年記念 ラジオドキュメンタリー「故郷の空に」制作スタッフ様 (青森放送)

津軽三味線を世に知らしめた高橋竹山の足跡を、イメージ豊かで心に響く音楽ドキュメンタリーとして構成・演出した。竹山に対する演出者の深い愛情が感じられ、またカセットテープとして残された「声の日記」や地元だけで披露した余芸の発掘なども、高く評価される。

(ディレクター・渡辺英彦、プロデューサー・大友壽郎)

奨励賞(3) 「きらびといきる バリバラくバリアフリー」バラエティー制作スタッフ様 (NHK教育テレビ)

障害者を笑うのではなく障害者とともに笑いバリアフリーを考える。脳性まひの男性とヘルパーの異色漫才という「お笑い研究部」、実際には約立たないなんちゃってバリアフリーを検証する「バリバラ珍百景」、ヘルパーが言語障害のいうことを当てる「最強ヘルパー養成塾」など、ありのままの姿をみせて、経験談や苦勞話を笑いに昇華する。日本のテレビ史上初の障害者バラエティーに挑む姿勢が評価された。

(ディレクター・山下徳子あつこほか、制作・日比野和雅)

特別功労賞

長年にわたって番組制作の先端をひた走り、わが国テレビ界の歴史を切り拓いた各氏に、敬意と尊敬をこめて。

- (1) 故・和田 勉 氏 (元NHK)
- (2) 故・木村栄文 氏 (元RKB毎日)
- (3) 故・守分壽男 氏 (元北海道放送)
- (4) 故・横沢 彪 氏 (元フジテレビ)

放送人グランプリ2011(第10回)贈賞式



選考過程

堀川とんこう



放送人グランプリはまず放送人の会の会員が賞にふさわしいものを投票し、これに基づいて候補者を選び、選考委員会がそれをもとに検討し受賞者を決定する仕組みになっています。

受賞者のみなさんにとってこの選考過程はどうでもいいことかもしれませんが、少しお付き合いをお願いします。

今年には会員の投票が非常にばらけており、グランプリの候補が25件、その他の賞の候補が35件。どこかに票が集中するということが全くなく、会員の投票をもとに決めたいと思っていた選考委員会は苦しみました。

しかし、もし「竜馬伝」に会員の投票が集中していたら「竜馬伝」をグランプリに選考委員会は決めたくさうそうでもないと考えます。人気ドラマ、大作、世間が異論なく「いい」「面白かった」と評価したものに後から追いかけるように表

彰するのはこのグランプリにふさわしいのだろうか、とも考えました。

一方、票がばらけたことは面白い、とも思いました。それぞれ投票してくれた会員はみんな見巧者です。その見巧者たちが1年を振り返ってみて、それぞれ世間の評価とは違う評価をしていました。放送人の会の会員の方たちが本来持たなければならぬ志、まなざし、それにもとづいて「自分のめがねになかったのはこれだ」と思っ

て投票しています。選考委員会も自分たちの評価が放送人の会の会員たちのまなざしの表現であるようにしたいと思って選考にあたっていました。

今年の選考委員は藤久ミネさん、河野尚之さん、鈴木典之さん、石井彰さんとこの4人は昨年と同じメンバーですが、今年新たに松山珠美さんに加わってもらいました。松山さんは放送批評懇談会のメンバーでトーク番組、バラエティー番組についてのコラムを書いているコラムニストです。

選考委員会は他の賞では議論しないような議論をして決めました。他の人がなかなか手を出さない、出せない素材、無理だろうとあきらめてしまうような素材、それらに果敢に挑戦して、その困難な素材をプロの知恵と技で何とかものにした、そんな

勇猛果敢な番組に選考委員の目は向かっていました。また、テレビ番組が難解になることをおそれて、わくわくし過ぎてしまい、知的であること、高度の精神性を失ってしまう番組が多いなかで、あえて難解をおそれない、知的な番組にも選考委員の目は向かっていました。

グランプリ

グランプリに選ばれた「大阪ラブ&ソウル」と争ったドラマ番組はNHK名古屋の「15歳の志願兵」、「竜馬伝」、「白洲次郎」

「太郎の太陽」などを演出なさった大友啓志さん、脚本家の大森壽美男さん、「鷗外の恋人」を作った今野勉さん、「何故君は絶望と闘えたのか」の演出の石橋冠さん。ドキュメンタリーは去年の夏を中心にかなりいいものが沢山あり、代表的なもの

「玉碎―隠された真実」のNSP、「日本は何故戦争に向かったのか」の4本のシリーズ、日本と朝鮮半島の5回シリーズ、「敗戦とラジオ」、それから受賞になった「何故希望は消えた?」あるコメと農家の半世紀」などすぐれたドラマ、すぐれたドキュメンタリーと争って最終的には大阪NHKのみなさんがお作りになった「大阪ラブ&ソウル」にグランプリをということになりました。

これは在日朝鮮人の青年とミャンマー

から亡命してきた女性をめぐる恋人たちの物語が契機となって、或る家族の物語が民族の物語でもあるといった、重層的な内容を持つストーリーです。今日ここに参加していただいているダバンサン・ヘインさんの熱演もありとても魅力的なドラマに仕上がっています。

在日の青年とミャンマーの女性との恋

物語なんて、ふつうは「そんなのできないよ」「無理だろう」とあきらめるでしょう。それを勇猛果敢に、大胆不敵に挑み、よくぞ成立したのだと思いますが、困難な内容をドラマとしても面白く、テーマは鋭く、今後の日本が抱える多国家共生の問題にも切り込んだすぐれた番組であったと思います。

特別賞

次に大森淳郎さんに特別賞をさしあげることになりました。準グランプリと言っているほど、推薦者からの熱心な推薦がありました。大森さんは一昨年の「BC級戦犯」獄窓からの声」というすぐれた作品があり、昨年は「敗戦とラジオ」で戦中・戦後ラジオがいかに権力・時の政府、戦後は米軍の占領行政に利用されたかをNHK内部からNHKを検証、前篇では戦中の政府、軍による激しい検閲・利用、後篇

では「日曜娯楽版」が姿を消してゆく経緯

に迫ります。ラジオ・テレビをわれわれ自身が常に検証しなければならぬというテーマは貴重です。もう一本「深く掘れ己の胸中の泉」沖繩学のまなざし」という作品があります。伊波普猷という沖繩学の始祖について、戦争によって命脈を絶たれようとした民俗学としての沖繩学を深く考察したものです。E.T.V特集を中心にここ数年目覚ましい活躍をみせている大森さんに特別賞をおくることになりました。

中崎清栄さんは元北陸放送のディレクターでその後テレビ金沢に移られました。かつて「ここより行くところなし」で奥能

登に生きる夫婦の物語を描き、以来10余年、限界集落化する奥能登での現実を見つめ、昨年は「笑って死ねる病院」―これは本にもなりました―と「田舎のコンビニ」が生まれました。撮影・構成担当の辻本昌平さんとのコンビも成果を挙げました。

奨励賞

E.T.V特集「なぜ希望は消えた?」あるコメ農家と霞が関の半世紀」は選考委員会で大変話題になりました。これは山形のコメ農家と農水省（昔は農林省）のドキュメンタリーです。日本の農業の行政をやってきたお役人と戦後ずっとコメ作りをやってきたコメ農家をカットバックで描いた日本農政史です。この両者は画面の中で

交流することはありません。ありませんが、コメ農家が霞が関のミス・リードで解体する姿を私は息も継がずに興奮して見ました。これが奨励賞です。

プロデューサーの矢吹さんとディレクターの久保さんはもともとと仙台でこの企画をお始めになった。ところが一人が東京に異動になってその作業は中断した。しかしまたもう一人も東京に異動になって再び、東京で作業を続けてついに完成したという長年の労作だと聞いています。

もう一本の奨励賞は青森放送が作った高橋竹山生誕100年記念番組「ラジオオドキュメンタリー「故郷の空に」です。これは竹山の声による日記、「今日は○○で公演した」というテープに吹き込んだ公演の記録を発掘したものです。1日の終わりに「これで終わりだ」と毎日言うのが印象的で、「終わりだ」と思いながら晩年の毎日公演を続けています。60歳を越えてからの公演回数が1000回を越えているそうです。竹山の孫の哲子さんとのほほえましい交流、竹山の人柄がにじみシーンもあり、心和む番組です。ドキュメンタリーとしての構成もしっかりしていて、優れた番組だ、と奨励賞になりました。

もう一本の奨励賞は、「きらつと生きるバリバラ」バリアフリー・バラエティー」

という障害者の障害者による障害者のためのバラエティーです。私も3時間ほど見てびっくりしました。「笑っていいかも」というサブタイトルがついていてこれも笑えます。レギュラーの司会者が3人、その中の一人が脳性麻痺の障害者です。

私たちは過剰に気遣いをし、健常者たちは実は自分を守るために「ヒューマニズム」というバリアを作って優しい差別をしているのではないかと思わせる強烈なパンチを浴びました。放送は毎月最終金曜日の夜8時から3チャンネルです。

特別功労賞

そのほか今回は物故された放送界の功労者4人の方に特別功労賞を贈ることにしました。和田勉さん、木村栄文さん、守分壽男さん、横沢彪さんです。

和田勉さん、木村栄文さんはよくご存知だと思います。守分さんは北海道放送でドラマを作られ、倉本聡さんと組んで「ほんかんシリーズ」のヒット作があります。一昨年久しぶりに小林多喜二を描いたドキュメンタリードラマ「いのちの記憶」を作りました。リリックで鋭い論評を含む番組でした。横沢さんはひょうきん族に始まるフジテレビのお笑い路線、漫才ブームを作った方です。この4人の方に「あなたがたの功績に対し私たちは深い尊敬の念を抱

受賞作をめぐって



いております」という賞状と楯を贈ります。

越智篤志

今日は数々の名作の番組の中からわれわれの「大阪ラブ&ソウル この国で生きることをグランプリに選んでいただきまして本当にありがとうございます」

日韓併合から昨年の100年、日本と韓国の関係をあらためて考える年であったと思います。大阪では焼き肉を食べるなら鶴橋が有名です。駅前から焼き肉の煙が流れている有数のコリアン・タウンです。ここを舞台にしてドラマを作りたい。ここで生きている在日の若い人はどんな夢を持っているのか、何を考えているのか、それを取材するところからこのドラマは始まりました。調べてみると昨年は日本が第3国定住という難民を受け入れ始める年でもありました。第一弾とすること、そしてわれわれの放送の翌日はミャンマーで20年ぶりの総選挙が行われることがわかり

ました。そんなことがわかってくると単純なドラマではなく、日本がこれからどんなふうになるかまで広げた面白いドラマになると確信しました。

堀川 先ほども言いましたが、非常に難しいテーマに果敢に挑まれたと思います。ちよつと照れるセリフの「それが私たちの恋物語の始まりでした」にしても、重い背景に挑む二人が軽く入って重く抜けて行くこうとしているのではないかと、いろいろ考えました。大変な労作で、俳優さんそれぞれ素晴らしかった。

大森淳郎さんについて



大森淳郎さんについては2、3分ではとても申し上げられないと思います。2008年にお作りになったBC級戦犯の「罪に向かうとき」をギャラクシー賞の選考委員をしていて拝見し、以来大森さんのファンになり、大森さんの名前を見た

びに追いかけてみておりました。昨年は「敗戦とラジオ」「深く掘れ己の胸中の泉」です。「深く掘れ」は沖繩のアメリカ統治、その前の日本帝国主義の統治、薩摩の統治、その前の原沖繩で作られた「おもしろ草紙」を自分たちの拠り所として沖繩のひとたちが脈々として伝え、研究している。その続いている200年の間の日本と沖繩の関係をうまく織りなした素晴らしい作品だったと思います。「敗戦とラジオ」の日曜娯楽版の問題とともに今年は大森さんに是非賞を差上げたいと言いました。しかし、今年度になって4月3日「原発被災地にて」、5月15日「ネットワークで作る放射能汚染地図」というすごい番組ができてきます。「ネットワークで」の方では原子力村と言われる政財界、学界から外れている原発問題、原子力問題の研究者の系譜が全部登場します。中心になってレポートし、地図を作っている木村信三さんという方が福島原発まで行って中に入らず、その土を採るとき「ブルトニウムが出てくるかもしれない」と言う。あそこ3基目はブルサマルで、ブルトニウムやストロンチウムなど何万年も消えない放射能が今福島に降り注いでいることになる。そのことを一言も言わずに編集して出しておられました。凄い番組なので今日

の受賞にからめて話をさせていたいただきました。再放送されるそうです。ご覧になってない方は是非ご覧ください。

中崎さんについて



鈴木典之 最終作の「田舎のコンビニ

はみなさんご覧になったと思います。中崎さんが10数年追ってこられた能登の過疎の経緯の集大成であり、作品としても頂点をなすものです。今度の大地震で日本の過疎問題が見直しをされる、そんな時期のメルクマールになる作品で、あらためてこの作品の価値を強調しておきたいと思いません。

中崎さんについて感心する二つを述べます。一つは、人柄でもあります。取材対象の日常の中にするりと実に巧みに入り込んで、その中から問題を見つけ、本音を撮ってくる才能です。実に巧みな取材、接触の仕方、本音の探り出す天性の才能をこれからも大いに発揮してください。

二つ目は経歴です。最初は北陸放送で名

を挙げ、定年後ライバル会社のテレビ金沢にヘッドハンティングされ、立場としてはフリーランサーという窮屈な立場でありながらテレビ金沢の現場の人を納得させる作品作りを毎年続けておられる。テレビの作品はもつとフリーランサーを活用すべきです。その先達として、女性として頑張っておられるので、今後は期待したいと思います。60歳を過ぎ、定年後、こんな活躍することは他の業界でも滅多にありません。

この二つを強調して私のラブコールとします。

「故郷の空」について



石井彰

青森放送の高橋竹山の番組は本

当に素晴らしいドキュメンタリーだと思います。もともと青森放送では太宰治や寺山修司をテーマにしたラジオドラマやラジオドキュメンタリーを作ってこられました。渡邊ディレクター、構成の須藤さん、この黄金コンビで今回は高橋竹山です。本

当に「やられた!」と思いました。高橋竹山が「3月23日、市民会館、3月〇日、神奈川〇〇会館」と言う声の日記の迫力に参りました。この声の日記で竹山の業績と素晴らしい映像が浮かんでくる。竹山はこれまで決してみせなかつた地元でのざれ歌を披露している。このテープを見つけてきて、竹山がこんなに楽しげに小唄や端唄を三味線で演奏しているのをみせた。これは竹山の新しい一面で、竹山の歴史に新しい1ページを付け加えたわけです。青森放送はこうした地元の人たちを大事にして、記録し、ドキュメンタリーにしている。そんな長いスパンを持った放送局のラジオへの姿勢を含めて今回の奨励賞です。奨励賞は小さな賞かもしれませんが、青森放送の皆さんがラジオの先頭を走っていると実感しています。

青森は今回の震災で八戸など沿岸部は大きな被災を受け、六ヶ所村には再生処理工場がある。ラジオで青森放送の皆さんがどんな放送をしていかれるのかずっと注目して行きたいと思えます。受賞おめでとございます。

「なぜ希望は消えた?」あるコメ農家と霞が関の半世紀」について



河野尚之

久保君、矢吹君おめでとございます。

かつてNHKには報道番組部に匹敵するくらい全国的に農林水産部というのがありました。いまNHK内の電話帳を練ると消費者目線の部はあつても農業、漁業の人の立場に立つた部はない。サイエンスや消費者の目で農業を考えている。この番組はその中で50年間農業をやっていた人の立場で農業の戦後史の番組を作っています。

1961年、安保の次の年に農業基本法が成立した。私は長年農業をやってきた家の一人息子です。百姓をやめてNHKにはいったので農業に対するある種の後ろめたさがあります。番組は農業基本法が成立してからの50年の歩みと日本の行政のミスマッチのようなものを執拗に追いかけている。個人的なことといろんなことを含めてこの番組には「参ったなあ」という思いで絶賛しました。

久保、矢吹の二人は地方にいたときもこ

の問題を追いかけ、NHKは転勤族ですからやがて転動しますが、東京へ来ても継続してこの問題を追いかけている。その姿勢にも感心しました。

おめでとございます。

「ちびっとなぎさる」について



松山珠美 「きらつといきる パリパラ」

を初めて見たときは「なんじゃこりゃ」と思いました。「これを放送でやっていいのか」とも思いました。しかし作り手の肝の据わった感じがよく出ています。障害者の中には怠け者もいますし、がんばりたくない人もいます。笑われたくない人もいます。笑わせたい人もいます。そんな思いでこの番組はできています。がんばる1日より、そうでない364日の方が大事です。月に1回の放送ですが、障害者の日常を番組にしているのが凄くと思います。

受賞の「とば



安達もじり

今日は本当にありがとうございます。

ございました。スタッフ全員にいただいた賞ということが何より嬉しいです。総力戦で、無我夢中で作ったドラマが皆さんに認められていただき本当に嬉しく思います。これからもこういったくぼつて頑張るつもりです。今回ミヤンマーから本当に難民としていらつしやったダバンサンヘインさんには、亡命者という微妙な立場を無理にお願いしてドラマに出ていただきました。



ダバンサンヘイン こんにちは。今回思

いがけずドラマ作りに参加して難民のことを理解していただけた機会ができたことをとても嬉しく思います。さらにこんな

賞をいただき、皆様とお話ができる機会を持ったことも感謝しています。ドラマ作りに関わることはもうないかもしれませんが、これからも一人の大学生として精一杯頑張りたいと思います。ありがとうございます。



林海象

脚本を書いた林海象です。普段

は映画監督をやっています。プロの皆さんから賞をいただくというのが嬉しいです。実は誰も見ていないんじゃないかと思っていました。見識ある方々に見ていただいて感謝しています。

この脚本は非常に欲張りで、在日の家族を描くだけでも難しいのに、安達は亡命ミヤンマー人と恋愛させて欲しいと言う。「そんなの…」と思いましたが、更に済州島で同じ民族同士が思想の違いによって殺し合うという四・三事件も描きました。これは多分ドラマで初めて描かれたもので、放送できるかどうか不安でした。どんな民族でもやはり人間なんだという視点で、ポップな感じで書くこうも思ってた書きま

した。脚本だけをやるということはない。脚本だけではなく、皆さんにすすめられて書いて本当によかったと思います。現在、自分で映画を作っています。難しい社会問題はこりこりだと思っていたのですが、何故か次作はハンセン病の画家・鈴木時治さんの生涯を描くことになり、すっかり社会派になつてしまいました。これも難物の脚本ですが、是非ご覧下さい。これからも脚本の仕事は致しますので、諸先輩方どうぞ仕事をさせてください。よろしくお願いします。



青木信也

このような小さな作品に光をあてていただきありがとうございます。

司会 青木さんはこの前に放送された「再生の街」のプロデューサーです。

大森淳郎

E TV特集班にいます大森です。ご紹介いただいた「敗戦とラジオ」は放送人の会が営々と積み重ねてこられた放送人の証

言のビデオを手掛かりにして作ることができました。この場を借りてお礼申し上げます。既にお亡くなりになってインタビュ―できない方々、例えば岡本愛彦さん、フランク馬場さんなどの証言があつてはじめてあの番組はできました。



ここ数年のE・T・V特集の作品に対して、というのが僕としては非常に嬉しく思います。特別に専門性があるわけでもなく、自転車操業でやってきました。「BC級戦犯」のあと、多摩川の河川敷に自転車通つてホームレスの方の取材をしたり、免田栄さんと一緒に冤罪を考え、そしてラジオ、沖繩とやり、仲間たちと一緒に原発の事故をやり、してきました。ちよつと宣伝ですが15日に放送した「ネットワークで作る汚染地図」というのはなかなかよく出来ていまして、来週土曜日・28日の午後3時から教育テレビで再放送されます。ご覧いただければ幸いです。

今日はありがとうございます。



中崎清栄

今朝金沢を出るとき、ふと亡くなったおばあちゃんのことを思い出しました。おばあちゃんは「仏さんがいつも見てるよ」と言っておりました。その言葉が今朝ふつと浮かびました。私はただわがままに動いてきただけなのに、今日、賞をいただけるのは、がんばってるね、と見てくださった方がいらつしやるからだ、と今朝ふと気づきました。ここへ来る途中の電車の中で胸がいっぱいになりました。辻本さんと二人ですつと番組を作ってきました。辻本さんとのコンビだったらお互い足りないところを補い合つていけます。彼も一人では出来ないだろうというところもあつて、二人でやれば1足す1が1・5にも2にも、あるいは3にもなつたりすることもあります。組織のなかでこれに拘るのはいばらの道です。人知れず苦労しました。私が北陸放送を定年退職することになったとき、丁度その時にテレビ金沢がインターネットで中途採用の募集をしていました。辻本さんはフリーのカメラマンで

したので、「採用試験を受けなさいよ」と薦めると、テレビ金沢では北陸放送で頑張った業績を認めてくれまして、ついでに私もということになりました。競争相手の会社でコンビでやっているのはおそらく民放には他にないと思います。喜び勇んでテレビ金沢へ行つたのですが、やはりよそ者で一からのスタート、ここでもやはりいい番組を作るしかないと思つてきました。昨年の丁度今頃、絶体絶命のピンチに陥りました。私は今年で65歳、前期高齢者になるからと引導を渡され、辻本さんは一番苦手なスピーディーな処理を要求される報道記者に配転になりました。辻本さんと最後の仕事になると思つて、報道記者の仕事が終わつた夕方から、あるいは週末穴水へ通いました。いろんな方に「以前作っていた向こう三軒両隣風のものはいいいテーマだ」と教えていただき、「あ、貯金があつた」と思い、その貯金を膨らますことにしました。絶体絶命のピンチの中で作つた「田舎のコンビニ」でした。この番組が何故か一人歩きをしてくれまして、私と辻本さんの怨念がこもっていたのでしょうか、いろんな賞を頂戴しました。本当にありがとうございます。



矢吹善秀

このたびはテレビの歴史を作つてくれた方々に見ていただき、こんな賞をいただくことができ、思いがけないことで、ディレクターの久保と一緒に喜んでおります。二人とも1年前は仙台放送局にいました。仙台へ行くまでは二人とも農業問題は全くやつたことがありませんが、仙台ではおコメのことでドラマを作ったり、気仙沼の漁村のドキュメントを作ったり、農業・漁業に力を入れておりました。東北を舞台に農業を取材すると農家の方はみんな頭がよくて勤勉で優秀で、にんげんとして尊敬できる方ばかりなのに、どうしてこの人たちはこんなに困っているのだろうかというのが率直な疑問です。何故こんなことになっているのかを調べ始めて、番組になって行きました。一昨年作り始めて、丁度政権交代があり、曲がりなりにも政治主導ということになりました。それまでは官僚が政策の無謬性とか、継続してやつて行くこともあつてOBは現役に遠慮してなかなか話をしてくれませんが

した。しかし政権交代後は失政は民主党のせいだ、と官僚が言えるようになり、OBが喋りやすい状況が生まれました。それで農政のことを聞くこうと官僚に毎日電話をかけ、収録しました。

先ほど河野さんから仙台で作り、そして東京でまた、というお話がありました。実はそんなに美しい話ではありません。仙台では「こんな番組を作っています。放送させてください」という訴えがどうしても通らず、私が昨年たまたま異動でE.T.V特集班になったので何度も提案したのですが通らず、東京に来て3か月たってやっと通してもらいました。それでまた作り始めた次第です。「何故官僚の話聞くのだ」「短い番組で農政の半世紀なんて描けるはずがない」など厳しい批判のある中で放送でしたから、賞をいただけで本当に嬉しかったです。官僚と政治家に「日本は何故こうなのか」を聞き、現場の方とクロスさせる番組はこれからシリーズ化していくつか作って行くこうと思っています。

3・11以降東北は全く違う状況になっていますが、その東北についても伝えて行きたいと思っています。

本当に今日はありがとうございます。



久保健一 普段は「プロフェッショナル

ル・仕事の流儀」という番組の班にいて、3か月に一人誰かを描くという仕事ですが、もう少し地に足をつけて、取材に通って、通って番組を作りたいと思っています。そして地方転勤を希望し、仙台に行きました。仙台では農政のことをやりたいと思っていましたし、小さなキャンペーン番組を作りましたが、その最後にこの番組を作りました。

農業政策の半世紀がいかにかまうまうまくなかったかがわかる番組になります、といくら紙で提案表に書いても、「提案表として使い難い」「教科書に書いてある通り、という番組になるのではないか」などと言われ、矢吹さんと最終的にはローカル放送になつてもいいからとロケをし、編集もアップした段階でやはり提案が通らないことになりました。「実は編集もできています」と部長に見てもらって提案を通してもらいました。その間、自分では価値があると思いましたが、カメラマンが農業政

策の分厚い本を読んでいたたり、「やつぱり意味あるよ」と励まされたりしました。突き通してよかつたなと思っています。

今は「プロフェッショナル」の班に戻りレギュラーでドキュメンタリーを作っているかと思っています。

この番組を見て、農家の人の証言と官僚の人の証言をみると、どうしても官僚の証言は無責任にみえます。農家の切実さに対して官僚はその程度なのかとみえてしまうのですが、取材してみると官僚もやはり一サラリーマンです。僕は行政の責任を問いつめて行きがちなのですが、責任の所在を問うことは本当に難しい。事務次官クラスの人は電話に出ることすらいやがりました。電話に出ても「そのことについては話したくない」と拒否されることが多かった。たまにインタビューに応じてくれた方は仮に無責任にみえたとしても「自分はこのことの責任をかぶる」という覚悟でインタビューに応じてくださったと思います。農家の方も「自分たちは儲かるためにあらゆることをやってきた。純粋な農家ではなく、土地で儲かるとなればそちらにも走った」と赤裸々に語ってくれています。官僚のかたも農家の方も自分たちの一番言にくい部分を自分たちは責任があるからと話してくれたことに対して感謝し

ています。これからもがんばって行きます。



大友壽郎 このたびの受賞は嬉しくて嬉

しくてしょうがないというところ。今朝青森を8時に出る新幹線に乗り、やっと災害復旧した路線を走りました。仙台付近と福島に入って徐行運転し、本来3時間20分のところ4時間20分かかって東京に到着しました。

番組の経緯を話します。丁度去年の今頃高橋竹山のお孫さんの哲子さんが私を訪ねてみえられ、100周年のコンサートをやりたいのだが司会をしてくれないか、という依頼です。私は昔アナウンサーをしておりましたので司会を引き受けました。コンサートは竹山さんのお弟子さんが多数出演なさつてとても1時間の番組には収まらない。渡邊ダイレクターに相談しますと「少し違う視点で番組を作りたい。今まで表に出ていない竹山さんの新しい音源も見つかった」とのこと。この企画はすぐ通しました。私はラジオ局長という立場

で、営業も持っていますので、番組を売らなくちゃいけない。各企業に話をしまずと大賛同を得ました。同時に竹山さんの生まれ故郷である平内町の商工会、青年団が動いてくださいます。番組は完売しました。



渡邊英彦さん

渡邊英彦 連絡を受けて賞を差し上げますと言われてびっくりしました。たいていの番組コンクールはエントリーして結果が出るというのがほとんどですし、これまでに出品して何回も落ちました。エントリーしていないのに賞をいただけるといふのに非常に驚きました。放送人の会というプロ集団の方に褒めていただいたことを非常に喜んでいきます。

昨年が高橋竹山生誕100年で、100年だから番組を作らなくちゃ、と言ったのは大友プロデューサーです。私は平凡な番組にしたくなかったので、青森放送の先輩である須藤さんに相談を持ちかけ構成をお願いしました。非常にいい構成ができたと思います。



城光一さん

城光一 みなさんこんにちは。NHK大阪放送局からやってきました。「きらつと生きる」の中の月1回の「バリアフリーバラエティー」に賞をいただき、どうもありがとうございます。

「きらつと生きる」は12年続いている障害者を主人公にしたドキュメンタリー番組なのですが、2年前から番組を変えて行きたいと考え、去年の4月からこのバラエティー番組が始まりました。最初はこんなバラエティーやって大丈夫かと非常に不安で、びくびくしながら、番組の中でも言い訳をしながらやっていたのですが、想像以上に好評で、回を重ねることに認知度も上がり、昨年12月には2時間スペシャルを放送しました。多くの方に見ただいて本当によかったと思っています。今回功労賞を受賞なさっている横沢彪さんにアドバイスをいただき、2時間スペシャルには横沢さんにも出演していただくという話があったのですが、残念ながら体調

が悪いということで実現しませんでした。横沢さんからは「民放の笑いを真似たものではなくNHK大阪ならではの笑いを追及して欲しい」とのメッセージをいただきましたが、それが横沢さんからの最後のメッセージになりました。それを肝に銘じています。私たちに足りないのは笑いのクオリティーの高さです。障害者の笑いとしてとどまるのではなく、一般の笑いとしてのレベルアップを目指したいと思います。今回いただいたのは奨励賞で、これからがんばれということですから、がんばろうと思います。



空門勇魚さん

空門勇魚 ご覧のとおり車椅子に乗っている障害者です。今日大阪からここまで来る途中、渋谷で「あんた、頑張ってるね」と声をかけられました。今の日本人が障害者を見るまなざしは障害にくじけず頑張っているというイメージが多いようです。ふだんは障害者のドキュメンタリーを作っていますが、非常に真面目なシリアスな作りになってしまっ。それが頑張っている

というイメージにつながると思っています。それを越えたいと思いつながら、障害者の方を取材して教わったのがお笑いです。障害者の作業場や自立生活センターに行くと、日常茶飯的に障害を話のネタにしてコミニケーションし、お互いの距離を縮めています。「それをテレビでなんでやれへんねん」とある日お叱りを受けました。それが出発点です。企画のほとんどは障害者団体あるいは個人の普段の生活の中にある笑い、面白い話です。ショー自体は「きらつと生きる」班がやっていますが、アイデアや発想は取材している障害者団体からいただいたものです。この1年そうやって番組を作ってきたのでその方たちにお礼を言いたいと思います。

只今、新会員募集中!

現在、会員数は202名です。会員数を誇る団体がありますが「とかくメダカは群れたがる」会よりも、ま、300名程度がよからうと。しかし、寄る年波も深刻。脱会ではなく、自然現象的オサラバ会員がめっきり増える昨今、加えてメディアもデジタル化時代。4、50歳台の若き？新会員を募集中。会員諸公の推薦をお願い致します。(M)

懇親会にて

司会 松尾羊一 例によって放送人の会第2部 恒例の「オレにも言わせろ！」の部に入りますが、まず福島県で農民となつて活動している秋山豊寛さん。ちなみにお住まいの田村市滝根町字入新田は計画的避難地すれすれの土地です。



松尾 羊一 氏

秋山豊寛

秋山ですが、上京すると東京の仲間たちからまだそんなところにいるのか、と言われました。NHKのラジオで空中からセシウムが検出されたと聞いて炉心はやられていると確信しました。私はしろうとですが多少は原発の本も読んでいます。セシウムが出てくれば炉心がやられていることは疑いようがない。原子炉本体は保たれているとベントを続けている。炉心がダメーシを受けてベントを続けければ放射能はほとんど空中に出てくる。プルトニウムも出てくるはず。そのことには何も触れない。

特に3号炉にはMOXというプルトニウムが多く生まれる燃料が使われていることを福島県人は知っています。それが爆発事故を起こした。これは大変です。記者会見で記者たちは追及しない。あれは記者クラブの属するものは追及してはいけな

いという暗黙の合意があるのか、あるいは暗黙でない合意があるのか、私は現場に行っていないので知りませんが、そんなメディアがどこまで生き延びられるでしょうか。

年間100億円も独占企業が広告費を使っているという現実、電気事業連合会も含めてさまざまな形で民放各社に直接・間節の影響を与えている現実。3・11はテレビの関係者がそれらの現実を含めてテレビのあり方を考えるまたとない機会だと思います。「原発難民」としてはこんなことはないにこしたことはないのですが、せめてメディアに関わる者としてはただ「メディアの自由」というだけではなく、「何から自由なのか」を考えたい。

今日受賞された方々は本当に苦勞されている、なんだかじわつと熱くなるような苦勞をなさっている、それに比べて私たちはいい時代を生きてきたのだと思います。そんな努力をなさった方々が受賞なさったことは素晴らしいことだと思います。そ

んな方々がテレビという非常に影響力の強いメディアの現場におられます。今度起こった事態を、NHK・民放の制作者みんなでもう一度見直すことができると思っています。

難民らしくない小ざつぱりした格好で出てきましたが(笑)これは私のちよつとしたシヤレです。今は知り合いの農家になります。ちよつどアスパラガスの収穫の時期で、絹さやが終わり、夏野菜の植え付けの時期です。私が世話になっている知り合いは群馬県の農家ですが、今日、明日種籾を播きます。有機農業をやっていますが私はいっしょに作業をします。



秋山 豊寛 氏

先日漁師の方が震災後久しぶりに、2か月ぶりに海に出て「体がとつてもよかつた」と言っていました。私も15年農業をやっていて、一次産業の基本は「生理」だといつづく思います。金儲けという部分はあるしそれに励まなくちゃとは思いますが、基本的には生物としての生理なのです。その部分が日本に残っています。

東北は秩序だつていると今回言われました。関東以北には「マキ」「マケ」という言葉があります。「あの人はマケがでつかい」という言葉を最初に聞いたときは選挙のときで、たくさんの借金を抱えたのかと思いました。「マキ」「マケ」というのは一党という意味で、英語で言えばclean、血族です。私が住んでいる福島県田村市滝根町、小野町の人たちはみんな何らかの形で親戚です。親戚という世間の目が物凄くきつい形で地域の治安を維持している。この構造は東北のいろんなところに特に漁村にあります。それを知らずに中央官庁からやってくる知事になった県がありますが、そこで特区を作ると言つて漁師の反発を受けていました。あの漁師一族の団結、或る意味では昔風の封建的です。しかしこれが秩序になつている。これが日本の現実で、民主主義だの蜂の頭だの言つてもしょうがない。それは頭の上を吹きすぎて行く近代でしかない。この物凄い血の部分が日本の秩序を形作っているのだと思います。それがマイナスに働く部分も当然あるでしょう。しかしこんな危機に対応するときの血の濃さはぞつとするくらいです。私は民族主義を言っているわけではありません。外から来た者にはこの世間の目が日本を形作る要素になつているのだなといつづく

感じています。福島でも行った先の群馬でもそうです。東京における、都市生活者の孤絶感は強烈なマケの世界から脱出して獲得した孤独であり、その代償として孤独死するなら勝手にしろ、と不思議な考えを持ちます。

放送、特に民放では後ろめたい部分をかかえながら仕事をしてきた者にとつて、この事態はどう捉えかえすか、そしてそれをどうエネルギーにし、孤立して努力している人とながつて行くか、そんな機会かと思えます。

司会・松尾 大変重い、含蓄のある話ですが、この続きは「福島だより」ということで会報に延々と書いていただきます。都会のマスコミ人たちに問いかける原稿になることを期待しております。

次は鶴橋康夫、かつて川口幹夫さんの後は俺がやるとほざいたこともあり、今は映画の現場に入っているとか、その両方を…

鶴橋康夫 今野さん、どうですか。あきらめてしばらくやってください。次は俺だとずつと思っていました、(会場・爆笑)来月からインドへ行きます。ガンジスの氷河まで行って神と対面してこようと思えます。

僕は放送人です。林海象さんおめでどう。鶴橋を浮かび上がらせてくれてありがとうございます。まだ見ていませんが。

この会は僕のお兄ちゃん、僕の師に会う場です。僕は放送人としてずつとやってきましたが、今は映画人でもあります。この映画人が林海象さんに会うと、脚本でも放送人がいいと言う。映画人に馬鹿にされないよう、放送人は頑張りましょう。



鶴橋 康夫 氏

堀川とんこうさんの今日の解説で僕は今日からタバコをやめました。秋山さんは菅直人に感動する心が何故ないのだろうと言いたかったと思う。感動を一度もしたことのない政財界、科学者がいるから、とんでもないことになっているのだと思う。感動する心があればとんこうさんのあの解説、批評になります。あれは45分かかりました。長い解説だったけどその間タバコを吸いたいと思わなかった。これで多分タバコを止めることができます。

今日は、いろんな後輩に会った気がする。中崎さんは定年後いろいろあったよう

ですが、その前もあったのでしよう。しこしこがんばってください。

なお私は放送人句会のメンバーで、この阿舟さん(西川章)が私の師匠です。先日句会での

「薔薇熟れて爆心地より15キロ」の私の句は、多分特選だろうと思った。(笑)信じて疑わなかった。僕はこの2か月で三陸と爆心地の俳句を57句詠みました。薔薇は放射能で熟れている。今そうなっている。爆心地から15キロのところに友達がいる。いま逃げています。というわけでこの句はいい句なのだけど、師匠は「鶴さんの被爆地は広島ですか？長崎ですか？」と聞く。師匠は爆心地はまだ長崎、広島だと思っている。今福島です。これからの僕の俳句はどうなっていくのだろう。(会場・笑い)相変わらず山を見、川を見てやるのかもしれません。

松尾 「爆心地より15キロ」には私も一票いれましたが、「15キロ」なんて言い方は蕪村の「さみだれや川を隔てて家二軒」や「昼顔やこの道唐の三十里」に通じます。そんなに気落ちしなくてもいいでしょう。(笑)

さて(見まわして)、島田親一さんは帰りましたか、ムーランルージュのことをド

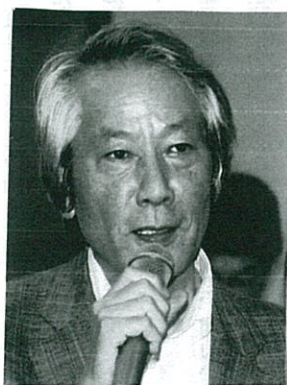
キュメンタリー風にしたものをやるとかでチラシを配っていました。

今回の特別功労賞の4人和田勉、木村栄文、守分壽男、横沢彪とあの世の神様のキヤスティングかと思えるほどで、ドラマ、地方、ドキュメンタリー、大衆娯楽とそれぞれ昭和テレビ史に残る業績があります。たとえば木村栄文の場合、われわれがやらせのどうのと細かい問題で「たごた言っているときに、おかまいなしに叩きつけるような映像で、どこからかが虚像でどこからが実像、ほんとうに撮った映像かわからない形で作る。しかし彼はそれをまざぐつていて、真実を求めていた作家。守分さんは倉本聡さんと組んで「りんりん」と「うちのホンカン」などを「東芝日曜劇場」でやった。RKBやCBCも同じくこの枠でドラマをやっており、最後に守分さんは小樽高商の先輩に当たる小林多喜一を描いて去りました。和田さんは砧に住んでいて夕方祖師谷の本屋に現れる。飲もうかということになり、彼の好きな汚い中華料理屋へ行つて喋るのだけど、そこで出て会話はみんなダジャレでした。気になって「ザ商社」を一昨日テープで再見しました。あれは松本清張の原作を越えた凄いいドラマです。山崎努はホリエモンを予言している。30年前に堀江貴文を描いている。

鈴木嘉一 今年の受賞の顔ぶれを見て、

一言で言えば「渋い」という印象です。堀川さんの説明では「竜馬伝」も候補だったとのことですが、あんな番組はほつといても何かの賞を取る。

受賞作をみると私が知らなかった番組がいくつかあります。私がこの会へ来るのは私が知らない番組が並ぶからです。何年前の札幌のコミュニティーFMラジオ三角山放送局は全く知らなかった。ここで初めて知って三角山放送局取材に行き、コミュニティーラジオの連載を10回くらいやりました。



鈴木 嘉一 氏

「バリバラ」も知りませんでした。「ラブ&ソウル」は知ってはいたのですが見逃しました。番組のことはだいたい知ってると思いがちなのですが、ここに来ると知らない番組が多く、プロの目利き、作り手側の目線に教わり、ネタを仕入れることができます。また書くネタがあるなあ、と喜んでいきます。

曾根英二 大阪の阪南大学で禄を食んで

いますが、やはり放送の現場の方が真実なのだと思えます。「昆虫には擬態があり、私の教員は擬態なのだ」と言ったら、「いや違う。お前はもどきだ」と言われました。その「もどき」をやっています。



曾根 英二 氏

4年生の学生のところには「祈りメール」が届くそうです。就職試験を受けて結果を待っていると「健闘をお祈りします」という「祈りメール」が届く。何回も届く。もちろん「祈りメール」なんか欲しくない。私は彼らにそんな貰うようなことはやめて自分で何かを始めればいいじゃないか、と言います。彼らは今の社会は中小企業なら職はある、と言います。しかし早稲田、慶応ならある職が阪南大学にはないのです。ドラマをやりたくて一生懸命な女の子がいます。海外に行き、インドへ行き、うちの中のエースです。東京のキー局を受験して最終でだめだったと帰ってきます。言葉がありません。「俺は無力だなあ」と嘆きながら「震災の現場へ行くか」と聞く

とみんな行くと。5人ほどつれて震災

の現場に行きました。テレビの現場は本当にいいなあと思います。中崎さんそうですね。

松尾 最後に、今野代表幹事にしめてもらいます。

今野 勉 鈴木嘉一さんがここへきて初めて知る番組が多いとおっしゃっていますが、それは私たちもそうで、地方だけで放送された番組は選考委員は見えていますが、我々は見ていません。ここで知ってこれから選考委員のところにあるDVDを見ることになりました。ここで知り合った方とは番組を見ていないのに「おめでとう」とは、現場にいる制作者としてはなかなか言えません。僕自身も見えていない人から「よかったですね」と言われるとひどく傷つきます。今日はいろんな方にあまり声をかけなかったのはそんなわけです。今日はありがとうございました。



新刊紹介
『大河ドラマの50年』

鈴木嘉一 著 (中央公論新社)



『江ノ姫たちの戦国』で50作目を迎え、来年の『平清盛』で50年を重ねる大河ドラマの全作品をあらゆる角度から取材、大河ドラマが単なるテレビドラマ史的な位置付けを超え、戦後日本を支えた放送文化としての足跡を吟味した労作である。プロデューサーが残した、例えば大原誠や近藤晋らの回顧録的な著作にも目を配らせ、『近代大河』への意欲やエンブラ外注化の波紋に触れ、渦中の脚本家を訪れ、ロケ先に赴き、ご当地誘致の経済的文化的背景にも及ぶ。周知のように著者は読売新聞の文化部記者として、生涯一記者の姿勢から恣意的な批評家でなく、「伴走車の視点」を心がけたという。暦年一作の長丁場に耐え、結果栄光の傑作もあれば、息絶え絶えにゴールインする孤独のランナーもいる。制作現場を確かめながら記録したユニークな書である(2,200円)。(M)

第13回「放送人の世界」

曾根英二・人と作品

第1回 3月8日(金) 13時30分

第2回 3月25日(金) 13時30分

会場 東京・青山「青山荘」会議室

出演者 曾根英二(山陽放送報道制作局理

事退職後、阪南大学教授)

聞き手 今野 勉(当会代表幹事)

東日本大震災の渦中で開かれたこの研究会、第1回(会報前号で速報済み)は参加に不安と戸惑いが見られたが、速達ハガキで再度呼びかけた第2回はますますの盛況。世情騒然の中2週連続で、岡山から空路(余震の続く陸路を避けて)駆けつけた曾根さんの心意気に、会員が応えた格好だ。会場は、同志的雰囲気がただよい、終始なごやかだった。

さて、90年代初頭から、腰のすわった報道マンの気骨を示して、テレビドキュメンタリーの分野で注目され続けた曾根英二の作品群には3つの大きな峰がある。瀬戸内海「豊島」の産廃ゴミ不法投棄問題、豊唾のおっちゃんの不当裁判問題、山村部の限界集落問題の3つだ。いずれも地方で埋もれがちな、しかし日本社会の根幹に関わる重要な課題を、深い洞察力と驚異のねばり腰で徹底追及している。しかも彼は、

映像作品と同時に優れた本も書いて、問題の周知に努めてきた。曾根さんが、テレビドキュメンタリストたちの中でも、特に「ジャーナリスト」の尊称で評価されるゆえんだ。

第1回目の先週は、20年間で9作品を連打して瞠目させた「豊島問題」を(既報のように)取り上げ、今回は残りの2つのテーマの作品鑑賞と検討を行った。

生まれつきの豊唾の上に教育も受けず「育った」おっちゃん「こと森本一昭さん(当時40代)は、600円をコソ泥して裁判にかけられる。しかしおっちゃんは話せない、読めない、書けないの三重苦で、被告に大切な「黙秘権」も理解できない。判決も理由も伝わらず、裁判長も困り果てるばかりだ。傍聴した曾根さんはこんな裁判がまかり通っているのかと疑問に思い、おっちゃんの日常の姿に密着取材する。彼の粗野だが憎めない人柄や孤独感、全盲の支援者などの善意と抗議の輪なども浮かび上がってくる。裁判は8年を費やして最高裁まで行き、結局「公判手続きの停止」となっており、おっちゃんは宙吊りの形の「生涯被告」とされてしまう。そして64歳でがんが亡くなる直前に、ようやく検察側が公訴を取り下げて終結するが、この間17

年、担当裁判官は12人。司法は一体何を裁いたのか。

曾根さんは3本の作品を発表し、硬直化が改まらない裁判制度と身障者など社会的弱者に無情な社会福祉の現状を視聴者に訴える。声高に、ではなく、受け手の理解力に託す柔らかさで…。

最後の峰となる「限界集落」問題の制作動機を、曾根さんは「番組制作者として、退職前に最後の意地を示すつもりで」と、ことば少なく語ったが、管理職になると現場から遠ざけられる企業慣行との軋轢も覗える、含蓄多い一言だ。

曾根さんの表現方法は、取材対象と常に正面から向き合い、ごまかしやあいまいさのない直叙式映像と簡潔・適確な語りを持つ。味だが、この作品ではカメラは自然と一体化した目のように悠揚迫らぬ呼吸で、山村の民の営みの日常に寄り添う。舞台は、地元岡山県の北西端、中国山地の尾根の村・神郷釜村。視力を失った農民作家・太田忠久さんの土への愛着と、名牛の飼育に賭ける平田五美さんを柱に、過疎の村で「どっこい生きる」土着の生活文化を活写してみせるのだ。疎外への諦念を偏屈(へんこつ)のポーズに滲ませて明るく振舞う村人たちの背後に、時代や政治への憤りが垣間見えてきて、自然の恵み豊かです

会生活者の下支え役を担わされている辺境の地域を、無策のまま見殺しにする社会はどこがおかしい、という違和感が強まってくる。

その疑問を一挙に増幅させたのが今回の3・11大震災だろう。「想定外」の大惨害は、モノ本位に利便性と効率化を求めすぎた国にも国民個々にも、否応なく反省と軌道修正を迫っている。そして「災後の眼には、曾根作品はこれまでと違って見える。予見性が強く印象づけられるのだ。会場から期せずしてその声が上がったのもむべなるかな、だし、本来座談の巧い曾根さんが口数少なく構えていたのも、作品を以って語らせれば通じると、受け手の感受性に委ねたからに違いない。

だとすれば、この催しを災害進行中の時期に敢えて強行した今野担当の蛮勇と曾根さんの熱い志は充分に目的を果たしたといっていいただろう。(鈴木典之 記)



人気番組メモリー

進め！電波少年

日時・3月19日（土）

午後1時半〜4時

会場・横浜・情文ホール

ゲスト・松村邦洋（出演）、

谷浩斗（演出）、土屋敏男（制作）

司会・雨宮望



雨宮 望氏

雨宮 アポなし、突撃取材、人権に配慮して真実が撮れるのか、など日テレが逃げ腰だった問題番組の私は共犯者、土屋敏男は黒幕、松村は被害者、谷は実行犯という役割でした。
土屋 92年3月、ウッチャン・ナンチャンのスケジュールが映画でとれず、何でもいから企画を出せというので「踊る電波芸者」と出したら、芸者から將軍になり少年になり、そして踊るが進むになって番組が始まった。第1回はエイズ検診をやるうとしたがプロダクションから圧力がかかってボツ。実はホツとした。

谷 村山総理の眉毛を切りに松村は鉄を振りかざしながら、永田町を歩いた。今なら警備にすぐ取り押さえられる。



松村 邦洋氏

松村 結局切りましたね。あの眉毛を落つこととして拾おうとしてどうしても見つからなかった。惜しいことをした。
土屋 アラファートの取材も松本明子の粘り勝ちで、記念写真がとれた。アラファトが死んだとき写真がないと報道は困ったそうだが、うちにはあった。誰も「ないか？」と聞きに来なかった。
雨宮 ヤバイ証拠をつかまれないから「全部生本番で記録はありません」ということになっていた。外部だけでなく日テレも身内もたまっていた。
土屋 番組の知名度があがってから「アポなし」がウエルカムになって刺激がなくなった。それで外国へ出た。
谷 ダイアナの取材のとき松村は川に落ちて「HELP」と叫んで警察に助けられた。マンデラ大統領には「よう！憎いぜ大統領！」と言っただけに行き、「ライ

オンは本当に強いのか」を取材し、それからダイアナという、ホテルの宿泊なしのハードスケジュールだった。

松村 ハダカになって逮捕され、真っ暗な刑務所に2日間入れられた。あそこが唯一ホテルのように眠れた。砂漠では本当に死ぬかと思った。水リットルのペットボトルに細かい目盛をつけて時間を決めて飲む。あの管理は厳しかった。

谷 猿岩石のシリーズはいつリタイヤしてもいいと決めていたし、スタツフは絶対助けない。猿岩石はベトナムで持ち金が尽き、パキスタンで栄養失調で入院した。入院してもカメラは回っていて、彼らは家に帰れない。



土屋 敏男氏

土屋 ロンドンまで行けるとは思っていなかった。ただドラマの最終回のようにゴールまで行って盛り上がるという経験はしなかった。
谷 猿岩石はとにかく食いたいの一心で、あのお供え食えるかなあ、と考えるながら坊主になった。あのころからカメラを気

にしくなり、いい顔になった。「ありがたい」が本気で言え、お辞儀が深くなった。

土屋 ゴール地点のトラファルガー広場に落とし穴を掘れと言っただろう。
谷 あれは無理。あちこち謝ってあの広場は使えたので、それ以上は無理だ。
土屋 予定調和は面白くない。松村降板の話でもずいぶん遊んだ。



谷 浩斗氏

谷 松本明子をNHKの紅白に出し、本番で垂れ幕を見せてNHKが激怒した。
雨宮 日テレの人間が「土屋の番組は許さない」と怒った。
土屋 元暴力団員をADに募集したことがある。面接で「①人を殺したことがあるか②犯罪歴がありますか③体に入れますか④犯罪歴がありますか」と聞くことしたが、びびってみんな聞かない。一人採用したが実によく働き有能だった。
とにかく破天荒な番組の、破天荒な大爆笑連続のトークショーでありました。
(記・伊藤雅浩)

第14回総会

第14回放送人の会総会は5月21日(土)

放送人グランプリの贈賞式の前に行われた。出席43名、委任状76名、計123名の過半数で総会は成立。まず、今野勉代表幹事から挨拶があり、①最大のイベントは日韓中札幌大会であること②東日本大震

災と放送について、近く会員の寄稿を中心に会報で特集を組むこと③新入会員を獲得しよう、などが強調された。

引き続き、活動報告、活動方針、予算決算をそれぞれ満場一致で承認した。

事業の報告と計画については荻野慶人委員長の司会で各プロジェクトのキャップが報告した。各プロジェクトのキャップ

は「名作の舞台裏」が石橋冠(今年度から渡辺紘史に交代)、「人気番組メモリー」が大山勝美、「放送人の証言」が荻野靖乃、「放送人の世界」が今野勉、「ドキュメンタリー・ワールド」が桜井均、「放送人句会」が西川章、「地域交流」が村上雅通、「日韓中テレビ制作者フォーラム」が山田尚、の

広報委員会については松尾羊一委員長が報告。総務委員会については北村充史委員長が報告。

活動はいずれも順調に行われ、確実に計画されていることが確認された。

予算、決算は左表のとおり。

(2011年5月21日 第14回総会承認)

2010年度(平成22年度)会計報告

(2010年4月1日~2011年3月31日)

(単位:円)

1. 前年度繰越金	8,434,797
2. 2010年度収入	4,349,519
会費(含入会金)	1,515,000
共催事業契約金・各種助成金	2,600,000
イベント関連収入	144,000
寄付・利息その他	90,519
3. 2010年度支出	6,015,886
一般管理費	2,799,119
(事務所費・人件費・会報発行費等)	
事業費	3,216,767
(名作の舞台裏・放送人の証言・放送人グランプリ等)	
4. 2010年度収支(1+2)-3	6,768,430
5. 預金・現金残高	6,768,430
普通預金(みずほ銀行赤阪支店)	519,629
郵便振替証書残高	6,240,000
現金	8,801
6. 次年度繰越金	6,768,430

2011年度(平成23年度)予算

(単位:円)

1. 前年度繰越金(上記6)	6,768,430
2. 収入(会費・共同事業・助成金等)	4,750,000
3. 支出	9,850,000
一般管理費	3,200,000
事業費	6,350,000
予備費	300,000
4. 次年度繰越金(1+2)-3	1,668,430

特別会計 テレビ制作者フォーラム2011イン札幌

(単位:円)

1. 特別会計収入(協力金・各種助成金)	16,650,000
2. 特別会計支出(会場関係費・運営費)	16,650,000

東日本大震災とラジオ

武本宏一

災害時にはラジオが強い、とはよく言われてきたことだが、今度の東日本大震災ではどうだったのか。

まず、「その瞬間」を身を以って体験したい方は、チューブを覗くとよい。M9級の大地震直後の生々しい実況は、岩手放送IBCラジオの投稿で聴くことが出来る。

男性アナが、緊迫した中にも冷静さを保って、「いま余震が続いています。停電が予想されます。携帯ラジオを身のまわりに置いて下さい」と必死によびかけている。その携帯ラジオだが、地震後TBSラジオが、被災地に送ろう、と呼びかけたころ、忽ちトラック2台分のラジオがリスナーから集まり、早速現地に運ばれたという。他のAM局でも同様だった。

停電の続く中、乾電池ひとつで動くラジオは、テレビよりもはるかに役立つ道具となった。

機材破損や電力不足で困難な事態に陥った中波ラジオに代わって、大いに活躍し

たのが、コミュニティFMだ。

これは超短波放送用の周波数を使うFMラジオ放送で、放送地域の市町村単位に限定はされるが、逆に地域に密着したキメ細かな情報、安否などの情報が発信できる。たとえば、津波で大きな被害を受けた石巻市の、ラジオ石巻。市役所の一角に設けられた臨時スタジオから、地元ニュースや炊き出し、給水などの情報を毎日届けている。

同じ宮城県の山元町に開設されたミニFMりんごラジオ。この局は、先の新潟大震災時に活躍した、地元長岡市のFM局の応援によってスタートしたものだ。

ここでは今、開設者でもある元アナウンサーの男性が、自ら被災者にインタビューしたり、また励ましのメッセージを読み上げたりして頑張っている。

新しいメディアについては、たとえば岩手県などの自治体は、フェイスブックやツイッターなどを使って、安否情報などを試みた。しかしサーバーがダウンしたり、携帯電話が通じなかったりして、期待したほどの効果は上がっていないようだ。その分ラジオの強みが再認識されているとも言えよう。

コミュニティFM局は、3月22日まで

に既に12局が開設され、活動している。

さて、震源地に遠いこの首都圏で、では私ほどのようにメディアに接していたか。それは大半がテレビの報道だった。そこでは、目にする度に悲惨さが倍増・倍々増していくようなシーンの連続……。まさにこの世も終わりか、という気分にはさせられず。まじう。

一方ラジオは音だけで、素朴な形で緊急事態に対応しており、リスナーの私は比較

的冷静にニュースを判断することが出来た。

盛岡市在住の直木賞作家・高橋克彦氏もこう述べている。「深夜に聴くラジオ情報は、テレビのように、希望を求める人に絶望を重ねてしまうことがなかった」。期待される「東北ルネッサンス」に、さあ、ラジオはどのような一役を果たしているのだろうか。

第4回 放送人の会 ドキュメンタリー・ワールド

放送人の会・東京大学情報学環共催

テーマ:映像の中の「東北」

日時: 7月16日(土) 午後1時30分~4時

場所: 東京大学・福武ホール(地下2階) 本郷通り内側、正門と赤門の間

あいさつ: 石田英敬(東京大学情報学環長)

トーク: 今野 勉(放送人の会代表幹事) 藤久ミネ(放送評論家)

報告: 桜井 均(会員・元NHKプロデューサー)

<ねらい> 東日本大震災は、物心両面でこれまでになく多くのものを壊し、押し流しました。東北は、近代日本の“バックヤード”として、農林水産資源や人的資源(兵員、出稼ぎ、集団就職など)を供給し続け、そのために自らの地域社会を荒廃させてきました。それに歯止めをかけるために、近年は、なけなしの自然資源(水、空気、森林、海浜など)や風景まで“売りに出す”ようになりました。たとえば、原発立地、リゾート開発など。しかし、いずれも裏目に出ました。「ふるさと」という言葉に象徴される“社会資本”は根こそぎにされ、放射能にまで汚染され、よりどころとなる記憶も失おうとしています。あらためて、東北とは私たちにとって何であったのか。テレビは東北をどのように記録してきたのか、映像の中で「東北」を再現して考えます。

「清々会」について

世話人：上村忠

はじめに

「清々会」は、TBS「旧・調査情報」周辺のOBを中心に始めた月一の飲み会。今般、松尾羊一さんの提案により、「放送人の会」会員の方にもお声をかける事となり、会の性格を紹介させて頂きます。

文人趣味と「清々会」

「文人趣味」とは、一言でいえば平俗な日常に知的スパイスをきかせて、味わいのある生活を楽しむもの。ここでいう「文人」とは職業作家（和製漢語でいう「文士」）ではない。職業は別にあるか無職で、趣味として読書・文芸・書画等に親しむ人種という。つまり、「文人」とは、職業ではなく、ライフスタイルなのだ。

「文人」は便利な言葉で、定年後には、「文人として生きる」と家人に宣言すればよい。文士ではなく文人だから、作品を書いて金を稼ぐ義務はない。読書、飲酒、旅行、映画、番組、音楽交友等々、自分の好む事をするのみ。

一方、家人の激しい批判を受けるので、自信喪失を防ぐため、似た者同士の自称文人たちと、月一回位は集まり、杯を交わし、氣勢をあげる必要がある。

そこで、老後の生活を見すえ、同好の士の飲み会を計画、TBS在職中（1994年）から始めた。

鈴木明（＝今井昭夫氏）の参加

今井明夫氏は、酒が飲めないのに、当会に毎回参加。今井氏は1970年頃、『TBS調査情報』の編集長に着任、沢木耕太郎氏を発掘。沢木氏の都合が悪い時の代打に、香港映画界の話を書き「鈴木明」で書いたところ、後の文春社長で、当時『諸君』編集長だった田中健五氏が注目、原稿を依頼してきた。今井氏はその後「鈴木明」名で各誌に登場、「リリー・マルレーン」等の作品で「大宅ノンフィクション賞」を受賞。一方、松尾羊一氏は『調査情報』に健筆を振り放送評論家の地位を確立。やがて伊藤雅浩氏が副編集長として着任、ほとんど席にいない今井編集長に代わり実務を取り仕切った。

当「清々会」は、80年代の『調査情報』的な談論風発の場を再現するのも狙いの一つで、17年前に今井氏と語らい、松尾さんをリーダーに発足。月一二百回を超えたのは望外の成果。今般、松尾さんの提案で「放送人の会」諸賢にもお声を掛ける運びに。

会の進め方

当初、テーマはなかったが、話が散るの

で、時期や季節に合わせた話題を20〜30分プロジェクトで放映し、互いに所感や蘊蓄を語る。話題は「花鳥風月」、江戸〜昭和間のレトロ系が多い。最近集まりが良かったのは、87歳になる東大・禅同好会OBが語った「正法眼蔵早わかり」。一方、「戦前美人女優写真真実」等、軟派系もそこそこ人気がある。直近（5月）は「南方熊楠」、この6月は「ポストン美術館浮世絵名品展」の紹介。

その他

初期は保守対リベラルの論争が多かったので「政治と宗教の話はしない（英国サロンの不文律）」に従い、趣味&鑑賞的なテーマを中心としてきた。

パソコン&プロジェクトは、美男美女の画像を写すと、私語やブライングを鎮める効果が絶大な事を大学の講義で発見、それ以来愛用している。

当会ではその必要もないが、念のため、参加者の年層に合わせて戦前女優や浮世絵美人の画像を準備してある。

だがしよせん「前座」芸で、後半の参加者フリートークが「真打ち」。名司会者の松尾さんが控えているから座が白ける心配もない。テーマ自由。テレビ論・ドラマ論・放送論等硬派の議論や、日頃思ふこと、気になること、有志の登壇&独演&マイク

独占も歓迎。奮ってご参加のほどを。

備考・月1回・原則最終木曜（6月のみ月末を外し23日）18時半より・会費4千円・会場（赤坂）インディアン・サマー。参加ご希望の方は左記へ葉書またはメールを。会場行き地図を含む案内状を送ります。

〒201-0003 狛江市和泉本町2・18・5 上村 忠

メール：tadasi_u@com.home.ne.jp

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

新会員紹介

今井義典（元NHK副会長）

国際報道分野を歩み「ニュースワイド」"おはよう日本"のキャスターで知られる。

上村 忠（元TBS調査局長）

一貫して調査畑を歩み、マーケティング論、独自の視聴率論を展開、著書「不易と流行」ほか多数。

金子ときよ

文芸春秋新社を経て、現「TBS調査情報」の編集にかかわる。TBSメディア総合研究所所属。

白井 博

テレビマンユニオン社長。「アメリカ横断ウルトラクイズ」「地球ZIG ZAG」を経て体験ドキュメントの長寿番組「世界ウルルン滞在記」をプロデュース。

「日韓中フォーラム」を議論

マスコミ学会研究発表会で

6月12日、早稲田大学での日本マスコミ学会春季研究発表会で、「東アジアにおける越境的なリージョン空間の構築―日韓中テレビ制作者フォーラムの実践から―」と題するワークショップが行われた。

企画・司会が玄武岩（北海道大学）、問題提起者として今野勉（放送人の会）、林健嗣（札幌テレビ）、討論者が今井義典（立命館大学）、鈴木弘貴（十文字大学）の各氏による、近年議論されている東アジアの新しい地域秩序形成には、そのための文化交流・メディアが必要だろうとの問題意識からのワークショップ。

今野氏と林氏が日韓中テレビ制作者フォーラムのこの10年の歴史を、起こったさまざまな問題を含めて具体的に語り、今井氏（放送人の会新入会員）はABU会長の経験の中から、中国の言論統制、共同制作番組「ロボットコンテスト」の成功を語り、鈴木氏は「ユーロビジョン・ソング・コンテスト」の紹介を通じてメディアの国際交流のヨーロッパモデルを語り、会は日韓中札幌大会への熱い期待を確かめて終わった。



林 健嗣氏



玄 武岩氏



今井義典氏



今野 勉氏

第二十六回放送人句会

◇平成23年5月11日（水） ◇於：赤坂・麦屋

◇出席：伊藤視郎、上村晁蛙、荻野慶人、鈴木もんど、鶴橋康夫、豊田まつり、中島文博、新村もとを、橋本きよし、林備後、松尾馬笑、森治美、西川阿舟（10人）

◇兼題：更衣、薔薇、打上げ

ユニクロで上下揃えて衣更え

もんど

街失せて想い出だけの更衣

慶人

生きざまを問うまなざしの薔薇と会う

もんど

さみだれて女優演かむ打上げ夜

文博

風に舞ふ羽根は小鳥の衣更へ

晁蛙

打上げに主役の居らぬ薄暑かな

もとを

薔薇咲けり狭庭に神の在いますこと

もんど

帰宅せる卓に薔薇と置手紙

まつり

更衣すれどまたけふ少し地震なみ

まつり

薔薇の束抱へ出待ちの漢かな

阿舟

花水打上げの嘘溶かしけり

治美

乱れ咲く薔薇の垣根の独居かな

文博

かはたれに薔薇切る睫毛長き人

もとを

咲き満ちて黄バラ紅バラ渦となり

晁蛙

指先に血のあとうれし薔薇盗む

文博

窓開けて風やはらかに衣更

きよし

打上げは修羅場となりて五月雨るる

備後

更衣白く羽化して宵の君

もとを

ねんごろに手向けの如く薔薇が咲く

康夫

愚痴いわぬ妻のおしゃれや衣更え

もんど

薔薇の棲む家に二人の余生あり

康夫

緑映え園児もはしやぐ衣更え

馬笑

坪庭に薔薇一輪の重さかな

馬笑

不良ぶる癖は直らず更衣

備後

打上げや箸のあつまる初鱈

馬笑

花茨疎開の日々が蘇り

晁蛙

亡き人の更衣居り奥座敷

治美

打上げてふあとの祭の賑やかに

もとを

薔薇の香で沐浴するやヴィナス像

晁蛙

小康のひといざなひぬ更衣

まつり

みちのくの形相新た薔薇の影

康夫

足すくむ野猫の道や薔薇の刑

馬笑

更衣序に切つちやえ腐れ縁

慶人

薔薇贈る言葉に刃忍ばせて

まつり

薔薇紅く弾むハバネラ憂さ晴らし

慶人

薔薇熟れる爆心地より十五キロ

康夫

日常は地震に崩れて薔薇館

きよし

夏近しともかくにも打上げぞ

馬笑

短夜の打上げの帰途言ふまじく

まつり

デパ地下を巡るにしても更衣

備後

節電で二十日早や目の衣更え

視郎

我がきみに薔薇盗人の一輪を

文博

薔薇館時が埋れてドアきしむ

きよし

津波の絵巻沢を恥づ更衣

慶人

次回放送人句会 ◇7月13日（水） 18:00頃集合

（18:30投句締切）◇於：赤坂・麦屋 ◇兼題：羅（うすもの）、白玉、脚本家（夏の季語を入れて）

◆特別選者：星野高士氏

会員名簿

2011.06.17 現在

【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】石井彰 石井清司 石井ふく子 石高健次 石橋冠
磯野恭子 磯村健二 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩 井上良介 今井義典 岩澤敏 【う】上村忠 碓井広義 歌田勝彦 宇野昭
【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大蔵雄之助 太田敬雄 大西康司 大西文一郎 大原れいこ 大山勝美
大類啓 大脇明 岡弘道 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小河原正巳 沖野暲 荻野慶人 小田久榮門 織田晃之祐
【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤迪 加藤義人 金沢敏子 金子登起世 兼歳正英
金平茂紀 加納孝夫 鎌内啓子 上安平冽子 鴨下信一 川口健一 川口幹夫 河邑厚徳 河村正一 【き】岸田功 北川泰三
北川信 北出晃 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 隈部紀生 【こ】小池勝次郎 河野尚行 児玉久男
後藤和晃 小南武朗 近藤晋 今野勉 【さ】斉藤伸久 斉藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均
佐々木彰 佐々木欽三 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 嶋田親一 清水満 下崎寛 下重暲子
城菊子 白井博 【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木克明 鈴木典之 鈴木道明 須磨章 【せ】せんぼんよしこ
【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高橋一郎 滝大作 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中直人 田中則広 田原英二 田原茂行
【ち】千葉勉 【つ】辻本昌平 露木茂 鶴橋康夫 【と】土居原作郎 堂本暲子 戸田佳太 外崎宏司 豊田由紀子 豊原隆太郎
【な】中崎清栄 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村敏夫
中村芙美子 中山和記 難波秀哉 【に】新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川章 二宮文彦 丹羽美之 【の】信井文夫
【は】萩野靖乃 橋本潔 林健嗣 林裕史 原由美子 原田庸之助 【ふ】深町幸男 藤井チズ子 藤田晋也 藤久ミネ
【ほ】星田良子 堀川とんこう 【ま】前川英樹 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本明 松本修 松本国昭 【み】三上義智
水上毅 水野憲一 三村景一 三村千鶴 宮川鎌一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨
【も】諸橋毅一 【や】八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世
【よ】横山英治 吉澤保 吉永春子 吉村直樹 【わ】和田智允 渡辺紘史

訃報

児玉清さん



5月16日、胃がんのため亡くなりました。

享年77。「役者も放送人です。是非入会してください」と一昨年の放送文化基金賞の懇親会で今野さんはじめ列席の会員たちが半ば強引に入会させました。(当時氏は放送文化基金賞「個人・グループ」部門の選考委員)。「早速「週刊ブックレビュー」の仕事について玉稿をお頼みしたが、渡米直前で忙殺と丁重な断り書きを頂き、さて次号こそと原稿依頼の矢先の訃報でした。「さあ、ここからは慎重かつ大胆にお答えください」と『アタック25』の名司会を36年間、92年にスタートした「週刊ブックレビュー」はブック・ウォーム(本の虫)の温かい目で、ときに鋭いつつこみで「真綿で首をしめられるようだ」と当該ゲスト著者からは畏れられ、万巻の書を読破し、翻訳が待てないとS・シエルダンやA・ヘイ

リーの原書を取り寄せ、随筆、切り絵は玄人はだしの粋な趣味人でもあった。「竜馬伝」の父親役が忘れられない。合掌(M)

編集後記

▼放送人グランプリ贈賞式にカメラマンとして張り切つてのぞんだのですが、フラッシュの使い過ぎかバッテリーがあがってしまいました。充電の道具を持参していなくてどうにもならず、テレビ金沢辻本カメラマンのカメラに頼ることにしました。今号に掲載した放送人グランプリの写真はほとんど辻本さん撮影のもので、辻本さんありがとうございました。▼「電気がないのは困るね」と駅のエスカレーターが動かないことを杖常用の松尾老は嘆きます。そこからは節電、こちらは電池▼東日本大震災については次号で特集します。会員の皆さんへの寄稿を中心に、座談会も考えています。近いうちに執筆依頼の文書をお送りする予定です。「大震災と放送」をテーマに4000字〜10000字くらいの原稿をご準備ください▼放送人の会のホームページのBBS(会員参加のページ)にご参加ください。パスワードは「hosojin」、内容は何でも歓迎。質問のお取次ぎサービスもするつもりです。(祝観)